HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	境界を越える写真
Author(s)	望月, 哲男
Citation	境界研究, 1, 1-17
Issue Date	2014-03-01
DOI	https://doi.org/10.14943/jbr.s.1
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61345
Type	departmental bulletin paper
File Information	01MochizukiTetsuo.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

『境界研究』特別号（2013）pp. 1-17

境界を越える写真

望月 哲男

1. ロナルド・レーガンのプレゼント

1987年、アメリカ大統領ロナルド・レーガンからソ連共産党書記長ミハイル・ゴルバチョフに、一枚のカラー写真とそのガラス製のスライドが贈呈された。写真の撮影現場は、南ウラル、ウファー県のズラトウスト(現チェリャービンスク州ズラトウスト市)にあった兵器工場の前。被写体は、同工場の皮革・塗漆部門に55年間勤務し、職長として退職した当年72歳のアンドレイ・カルガーノフ氏と、ともに同工場の現役職員であるその息子および孫娘。撮影年は贈呈の年から78年前の1909年である。

カルガーノフが当時珍しかったカラー写真の被写体に選ばれたのは、おそらくこの町の名高い住人だったからだろう。工場での精勤ぶりによって何度も褒章を受け、1897年には名誉ある職長のカフタンを賜っていて、写真で身に着けているのもそのカフタンである。そうした功績から、彼は皇帝ニコライ二世にまみえる機会さえ与えられた。日露戦争の1904年、極東に派遣される兵士たちの謁見に当地を訪れたニコライを、「パンと塩」をもって歓迎する栄に浴したのだ。



三世代：A.P.カルガーノフと息子および孫娘
（ズラトウスト兵器工場前：1909年）

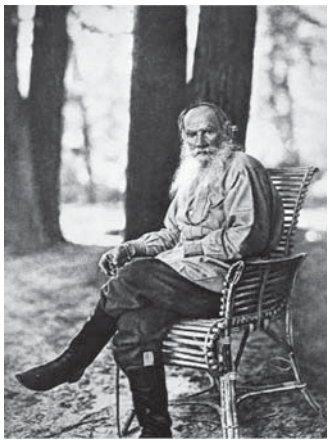
写真は、生涯をささげた兵器工場の前に二世代の家族＝後輩を従えて立ち、見知らぬカメラマンを見つめる老人の多少緊張した表情を、帝政末期の工場町の雰囲気とともに再現している。迷走し始めたペレストロイカのかじ取りに忙しかったゴルバチョフは、海の向こうから届いた革命前ロシアの光景を、どのように受け止めたのだろうか。

おもしろいことに、モスクワに届いたこの写真のスライドを、ソ連政府はなぜか首都には残さず、かといってズラトウスト市にも送らず、同じウラルの町ニジニ・タギールの郷土誌博物館に収めた。「おそらく、モスクワのお役人にとっては、いつものことながら、ニジニ・タギールだろうがズラトウストだろうが、どうでもよかったのだろう。どっちみちウラルのどこかに違いないのだから、それでよしとしたのだ」――意地悪な解説者はそ

んな風にこのエピソードを結んでいる[1]。

2. 再発見された写真家

この興味深い写真の撮影者の名はセルゲイ・プロクーディン＝ゴールスキー（1863–1944）。ロシアで最初に本格的なカラー写真を撮った写真家の一人として知られる。有名な作品の中には、領地ヤースナヤ・ポリャーナの庭に座った、最晩年の作家トルストイの全身像や、舞台衣装をつけたオペラ歌手シャリャーピンの肖像などがあるが、一番の貢献は、帝政末期のロシアを中心とした各地をカラーで撮影した約3,500点の風景・人物写真である。これは写真家自身の企画によるプロジェクトで、1903年にフィンランドのカレリア地方の撮影をもって開始され、革命直前の1916年頃まで続けられた。初期には一時ペテルブルグの赤十字社と提携し、1909年から数年は、ニコライ二世の好意で、皇室・政府の補助と便宜を供与された。並行して、ロマノフ朝の300周年記念に合わせた同家ゆかりの地の撮影や、祖国戦争100周年に合わせた関連地域の撮影も進められた。ただし10年間にフィンランドから極東まで、ロシア全土を10,000点のカラー写真に収めるという大計画は、第一次世界大戦とロシア革命のために挫折し、プロクーディン＝ゴールスキー自身も1918年に亡命した。



ヤースナヤ・ポリャーナの
レフ・トルストイ（1908年）



メフィストフェレスの衣装を着けた
フョードル・シャリャーピン
（サンクト・ペテルブルグ：1915年）

亡命後はイギリスとフランスで写真技術の研究開発や映画撮影に携わり、息子たちとアトリエを経営。1931年頃には、亡命時にロシアに残してきたガラス製のスライドのうちの多くをフランスで受け取り、『写真に見るロシア』展（1932年1月）などを開催した。第二次大戦下の1944年に死去。残された2,000点弱のカラースライドは、遺族によってロックフェラー財団に売却され、アメリカの議会図書館に収蔵された。

20世紀末にその仕事の意義が見直され、現代的なデジタル技術の助けによって、コレクションの大半が写真の形に現像された。今日ではアメリカ議会図書館のウエブサイトをはじめいくつかのサイトで、生前に発行した絵はがき類を含むほぼすべての作品が公開され

(1) 上記の経緯および引用は、以下を参照。Первые цветные фотографии Златоуста из коллекции Сергея Михайловича Прокудина-Горского [http://www.zlatoust.ru/about/foto1910.html]（URLは、2014年1月15日現在有効。以下URLについては同様）.

ており、またこの写真家の生涯と仕事をめぐる国際的な共同研究プロジェクトも進められている。

したがってレーガンのプレゼントにまつわる上記のエピソードは、ひとたび海を渡ったこの写真家の作品が、ペレストロイカを契機とした米ソの蜜月の雰囲気の中で、時空間の境界を再び超えてロシアに里帰りした記録としての意味を持つ。

以下では、この作品の生みの親である写真家の事績を概観しながら、20世紀の初めと終わりにまたがるこの越境物語の背景を考えてみたい。

3. ある写真家の生涯

プロクーディン＝ゴールスキーの経歴は三期に分けて考えることができる。第一期は写真術の専門家となる1901年までの時期、第二期はカラー写真家として活躍した1902年から1918年までの時期、第三期は1918年の亡命以降の時期である[(2)]。

第一期：1863年8月18日、退役少尉の長男として誕生。生地については、ペテルブルグ、ガッチナなど諸説があるが、公式サイトでは父の領地ヴラジーミル県ポクロフスキー郡フニコヴァ・ガラ村とされている。写真家の弟の孫に当たるナターリヤ・ナルィシキナの記述によれば、プロクーディン＝ゴールスキー家の先祖は、中世期にタタールのくびきから脱却する契機となったクリコヴォの戦い(1380年)において、ママイの軍を離れてドミートリー・ドンスコイに味方したタタールの公ムッサ(ムルザ)で、ロシア名はピョートル。褒美に与えられた知行地の名ガラ(山)からゴールスキーの姓を得た。ピョートル・ゴールスキーはリューリック朝の公女の一人マリヤと結婚して王朝と縁戚関係を持ち、孫の代のプロコピイがもらったあだ名プロクーダから派生した姓を付したプロクーディン＝ゴールスキーが、この一族の姓となった[(3)]。家系をめぐるこうした「伝承」は、この写真家の「帝国的」背景を神秘化する役割を果たしていると思われる。同家は市長、外交官、軍人などを輩出した家系で、曾祖父ミハイロは作家・劇作家だった。

後の写真家はまずツァールスコエ・セローのアレクサンドロフスキー・リツェイで学習し(86年中退)、続いてペテルブルグ大学物理数学部自然科学科で聴講した(88年まで)。この時期に同学部で教えていた化学者ドミートリー・メンデレーエフ(1834–1907)の指導を受けたという説がある。ちなみにメンデレーエフも光学と関連した自然観察に深い関心を持ち、1887年には気球による日食観測を行っている。カラー写真術に関連する整色法の研

(2) 以下の伝記記述は、主として次のソースに依拠している。*Светлана Гаранина*. Прокудин-Горский Сергей Михайлович [http://sarkel.ru/istoriya/prokudin-gorskij_sergej_mihajlovich_svetlana_garanina/]; Краткая биография С. М. Прокудина-Горского [http://prokudin-gorsky.org/rightpages.php?fname=bio].

(3) *Наталия Нарышкина-Прокудина-Горская*. Семейная сага: Секунды, минуты, столетия... СПб: Нестор-История, 2010. С. 41–45.

究も、この時期に行った。直接の指導関係は不明だが、同時代の先端的な科学技術分野である写真術への関心を、両者が同時期に共有していたのは間違いない。

この後プロクーディン＝ゴールスキーは帝室軍医学アカデミーで学び、同時に絵画やバイオリン演奏も習得した。演奏は後に手を火傷したせいで放棄。1890年に卒業後、王妃マリヤ・フョードロヴナが統括する半官のデミードフ勤労者子女保護施設(ペテルブルグ、後の女子商業学校)に就職した。同年にガッチナの製鐘・製銅・製鋼工場の長アレクサンドル・ラヴロフ(金属学者で1866年創設の帝室ロシア技術協会(ИРТО: Императорское русское техническое общество)会員)の娘アンナと結婚して(4)、同工場の理事局長を兼務する。そうした生業の傍らで、写真術に関する知識と経験を深めていった。

1898年、写真術の専門家を自認した彼はИРТО写真部門(第五部門)会員となり、「流れ星(流星群)の撮影について」という報告を行う。同年に写真技術を論じた論文「ネガからのプリントについて」、「ハンド・カメラによる撮影について」を発表、ИРТО写真部門展覧会に17–18世紀絵画の写真を出品した。1900年にはパリでИРТО主催の写真展に白黒写真を出品。同年、ロシア地理学協会に入会した。1901年、ペテルブルグにプロクーディン＝ゴールスキー写真亜鉛凸版および写真技術工房を設立して、写真を生業の一つとした。

第二期：1902年の六週間、プロクーディン＝ゴールスキーはシャルロッテンブルグ(ドイツ)の高等技術学校に留学、分色の権威アドルフ・ミーテ教授(1862–1927)にカラー写真術を学び、これがカラー写真家としての出発点になった。ミーテは写真術に関するパイオニアの一人で、感光性を高める増感色素(エチルレッド)を使ったミーテ=トラウベパークロモ乾板(1902年)や順次露光式三色分解カメラ(ミーテ三色カメラ：1920年代)などで歴史に名をとどめている(写真術史に関しては本論第4章に別記)。この頃すでに独自のカラー写真用カメラを開発し、プロクーディン＝ゴールスキーが師事した1902年4月には、ドイツの皇族にカラー写真の披露会(いわゆる幻灯上映)をしていた(5)。彼に学んだプロクーディン＝ゴールスキーは、帰国後同年12月のИРТО大会で、ミーテの手法によるカラースライド写真の作成プロセスを披露し、好評を博した。

1903年夏にパンフレット『インスタント・ハンドカメラによる整色露出：感色板(整色板)作成手引き付き』を出版。ドイツの会社に依頼してカラー写真撮影・映写機を作成し、8月と9月に最初のロシア帝国カラー撮影旅行でフィンランドのカレリア、サイマー運河などをめぐった。以降、毎年のように帝国各地を旅しながら撮影した。1905年にはダゲスタン、

(4) ナターリヤ・ナルィシキナの記述によれば、妻マリヤ・アレクサンドロヴナは数学者のソフィア・コヴァレフスカヤを偲ばせる才媛で、スエーデンで講義をしたこともある学者、作家だった。Там же. С. 73.

(5) 興味深いことに、ミーテもプロクーディン＝ゴールスキーと同じく天体の撮影に関心を持っており、この少し前に天文写真をテーマとした博士論文を書いている。後に両者はそれぞれ、日食のカラー撮影のためにシュピッツベルゲン、テンシャン山脈へと赴いている。

フィンランドなどの写真70点を公開。同年ペテルブルグの赤十字社とロシアの半分を映像化する契約を結ぶが、相手の予算不足で契約は破棄された。この年、日露戦争写真集の作成にも加わっている。

1906年には雑誌『写真愛好家』編集長に就任し(1909年まで)、色彩再現技術に関する一連の論文を発表する。同年4月、ローマの応用化学学会写真科学・写真術部門で発表し、この後国際的な写真研究の場に関わることになる。5月から9月にかけてベルリン、ミラノの写真展をめぐり、リヨンのリュミエール兄弟を訪問した。10月にはИРТО大会でリュミエール兄弟のオートクローム乾板(本論8頁を参照)によるスライドを公開。12月から翌年1月にかけて、日食撮影のためトルキスタンへ出かけている。1907年にはモスクワのロシア写真協会がプロクーディン＝ゴールスキーをリュミエール兄弟とともに名誉会員に選出。同年ИРТО写真部門代表となり、アントワープ国際展覧会金メダル、ニース写真クラブ展示会の最高作品賞を受賞して、広く同時代世界に認められた。同年、写真技術ハンドブックを出版し、カラー絵はがき第一シリーズを発行した。1907年にはメンデレーエフ学会で最新の写真化学理論を報告し、100点の写真を公開している。

1908年3月、作家レフ・トルストイにカラー肖像写真の撮影を申し込むが、その際、技術開発のおかげで一件の撮影に一秒から三秒ほどしかかからないと説明している。トルストイは妻ソフィアの意向を聞いた後にこれを受諾、撮影は5月22日から23日にかけてヤースナヤ・ポリャーナで実行された。作品はロシア最初のカラー肖像写真として絵はがきや雑誌の付録とされ、広く流布することになる。

1909年、ミハイル・アレクサンドロヴィチ大公の仲介でニコライ二世にツァールスコエ・セローの宮殿へ招かれ、カラースライドを披露。感動した皇帝がロシア全土撮影の許可と支援を約束した。10年間でフィンランドから極東までを一万点のカラースライドに撮影し、国民の教育に資するという構想ができあがり、同年から実行に移される。皇帝は交通大臣セルゲイ・ルフロフを介して移動用のプルマン客車、汽船と乗組員、モーターボート、オフロード用フォード乗用車、各地への通行証などの支援を与えた。ただし、それ以外の予算の約束がなかったため、撮影費自体は写真家の自己負担となった。プロクーディン＝ゴールスキーは1910年ココフツォフ財務大臣に、撮影費調達のため、既撮影分スライドの国費買い取りを申し入れ、よい感触を得たが、ストルィピン首相暗殺(1911年)などの状況下で、実現しなかった。宮廷でのスライド披露は、1913年まで続けられた。

1910年、写真家の著作権に関する説明デモに参加。ヴォルガ流域など各地の撮影旅行の結果、同年12月の報告書では、すでに1,300点のカラー写真を撮影したと証言している。

1911年には映画撮影にも挑戦し、2月と3月、トルキスタンでセルゲイ・マクシモーヴィチと共同開発したカラー映画用カメラで、初めてのカラー映画を撮影している(これも含め映画作品の多くは残っていない)。7月コストロマ旅行に画家ニコライ・レーリヒと同

行するという企画があったが、結果は確認されていない。ナポレオン戦争の故地などを含め、年末までに既撮影件数を2,200に伸ばす。

1912年、1月4日ペテルブルグの全露芸術家大会で「図像的ロシア研究に対する真色写真の応用」のテーマで報告。この年の祖国戦争（対ナポレオン戦争）100周年記念と翌年のロマノフ王朝300周年記念をテーマに撮影を行う。

1913年、2月実験的カラー動画「ロマノフ王朝300年記念祝典における皇帝陛下のネフスキー大通り行幸」を撮影する。4月信託会社「S.M.プロクーディン＝ゴールスキー商事」を設立。「安価なカラーフィルム・スライド作成法」「カラー映画撮影法」で独、英、仏、伊、露で特許申請を行う。この年までに3,350点のネガ、1,000点のポジを蓄積した。パリの劇場で自作を公開している。

1914年、3月カラー写真とプリントサービスの株式会社「ビオクローム」を設立、前記商事の資産を移管した。8月カラー記録映画「クレムリン皇帝行進」を試撮。8月第一次世界大戦が勃発すると、政府の要請で軍関係の撮影、外国写真の検閲、航空写真の分析に従事した。10月天然色スライドの作成に関するロシアの特許を取得する。

1915年、オペラ歌手フョードル・シャリャーピンをボリス・ゴドゥノフおよびメフィストフェレスの扮装で撮影。1916年、五等文官に昇進する。この年ビオクローム社がカラー記録映画「征服されたトルコの都市バイブルト、ママハトゥン、エルジジャンと大公ニコライ・ニコラエヴィチの視察」を作成している（白黒フィルムが現存）。

ロシア革命後の1918年3月6日、ペトログラード写真映画学校設立委員会に参加する。3月12日、19日ペテルブルグの冬宮で教育人民委員部主催のイベント「写真の奇跡」に参加。これがロシアで最後のカラースライド発表となる。5月25日ソヴィエト政権首班レーニンがロシア製紙工場の理事にプロクーディン＝ゴールスキーを含める指令を出す。写真・写真技術高等学校理事会にも参加要請を受ける。6月27日ノルウェーに公務出張。8月末二回目のノルウェー出張の際、亡命した。

第三期：亡命後プロクーディン＝ゴールスキーはノルウェーで仕事の継続を試みるが、1919年夏に英国への招待を受け、9月に移住した。英国では主としてカラー映画撮影に従事し、1920年12月には映画撮影のために南仏へ旅行している。同年、助手のマリヤ・シチェドリナと再婚。これ以降1922年にかけて『英国写真ジャーナル』に記事を連載し、またカラー映画撮影機の特許を取っている。

1921年3月、最初のカラー映画作品をマスコミや専門家に披露。映画制作ユニットに参加のためニースへ旅行している。1922年、一度のシャッターで三色分解写真が撮れるカメラの特許を申請する。

1924年、亡命してきた息子らとともにニースで「ELKA」フィルム社を設立。1925年、前

妻アンナが娘エカテリーナと孫を連れてフランスへ亡命。この年プロクーディン＝ゴールスキー一家がパリで写真アトリエを開店する。1931年頃には、故国に残してきた写真コレクションの大半がソ連からフランスへ送られ、プロクーディン＝ゴールスキーの手に戻った。1932年1月『写真に見るロシア』展を開催。同年3月ロシア芸術家ユニオンで120点以上の写真を公開した。

1935年、最後の作品となる末娘エレーナの肖像二点を撮影。何度かの展示を行う。1936年、中部ロシアの風景写真展を開催。1943年、パリのロシア人用老人ホームに入る。1944年9月27日パリで死亡。1948年、相続者たちが残ったコレクションを米国議会図書館に売却した。

4. プロクーディン＝ゴールスキーの写真術と写真観

プロクーディン＝ゴールスキーがカラースライド撮影に用いた原理は、三色分解（加色法）と呼ばれる一般的なもの。被写体の像を赤、緑、青の三原色のフィルターに通して三種類のネガ（分解ネガ）を作り、それをポジ（分解ポジ）に変換して、再度それぞれを対応する三原色のフィルターに通して映写し、合成すれば、被写体が色つきで再現できるという原理である[(6)]。これは1861年にスコットランドの物理学者ジェームズ・マクスウェル(1831–1879)が三原色理論の証明として考案した装置で、いわゆる幻灯の仕組みである。

幻灯の映像をカラー写真（カラーフィルム、カラープリント）という形でフィルムや紙に固定するためには、さらに減色法という処理を必要とするが、これはフランスの写真技術者デュコ・デュ・オーロン(1837–1920)が1868年に開発した。三色分解（加色法）によって作られた赤フィルターポジ、緑フィルターポジ、青フィルターポジをそれぞれシアン（原色藍）、マゼンタ（原色紅）、黄（原色黄）という補色に置き換え、重ね合わせて合成する方法である。

以上の二つの原理を枠組みとして、カラー写真技術は発達した。発達の一つの方向は三色分解を合理的に行う手法の開発で、三原色を一枚のスクリーンに隙間なくちりばめる「三色モザイクスクリーン法」、特殊な鏡などの組み合わせによって光を分色し、一回の露光で三種類のネガを作る「ワンショットカメラ」、原色フィルムを重ね合わせて一挙に感光させる「トライパック」や「バイパック」がある。

もう一つの方向は感光性そのものを改良するもので、ヘルマン・フォーゲルら化学者による増感色素の研究により、オルソクロマチック（正色）フィルムやパンクロマチック（全色）乾板が開発された。プロクーディン＝ゴールスキーが師事したアドルフ・ミーテもエチルレッドという増感色素を開発し（1902年）、ミーテ＝トラウベパークロモ乾板を考案し

(6) 以下、カラー写真術の歴史については、次の書籍による。石川英輔『総天然色への一世紀』青土社、1997年。

ている。彼はまたカメラ自体の開発にも意欲的で、縦長のパンクロマチック乾板に三色分解フィルターを重ねたものを順次露光させる「ミーテ三色カメラ」を開発している。

プロクーディン＝ゴールスキーの自身の努力もミーテと重なっている。1903年にはミーテの原理によるインスタント・ハンドカメラを作成、撮影旅行に携帯した。1905年以降は感光性(感色性)に優れた乾板作成のため薬剤開発に取り組んだ。1906年にはリュミエール兄弟の開発したモザイクスクリーン式のオートクローム乾板[7]の技術を学び、実演もしているが、プロクーディン＝ゴールスキー自身はあくまでも三種の乾板をワンセットとして用いる方式にこだわった。これはやがて出現するコダクローム(多層発色式カラーフィルム)によって淘汰される方向だったが、彼がこだわったのは、(当時の技術で)何度でも映写、現像、印刷ができて、しかも保存可能な媒体を担保することだったという[8]。そうした発想に基づいて、彼は乾板、インスタントカメラ、ワンショットカメラ、カラー映画撮影機などを自己流に開発し、いくつかの特許を取っている。結果として残された写真資料も、その多くが三点一組のガラス乾板であり、写真家の意図通り、現代の技術を応用することで、見事に100年前の世界像を再現してくれる。

1908年に作家トルストイにカラー写真撮影を申し入れた際、彼は以下のように自分の仕事を説明している。

> 拝啓　レフ・ニコラエヴィチ様
>
> 最近小生は、誰かある者が(名は失念しましたが)先生を撮影したカラー写真乾板の現像を頼まれましたが、結果はまったく思わしくありませんでした。明らかに撮影者の腕が未熟だったからです。
>
> 天然色写真は小生の専門とするところで、もしかしたら新聞雑誌等に載った小生の名がたまたま先生のお目にもとまっているかも知れません。積年の研鑽の結果、現在では上質な真色の映像を再現することができるようになりました。小生のカラースライド映写は、ヨーロッパでもロシアでも知られております。
>
> いまや小生の方法と小生の乾板を用いれば、撮影時間は一秒から三秒しか要しません。そこで折り入ってのお願いですが、一日ないし二日貴家を訪問して(二日というのも、ご健康状態や天候を考慮してのことですが)、先生と奥様のカラー写真を何点か撮影させていただけませんでしょうか。
>
> 思うに、先生のお姿をお屋敷の状況とともに真色の写真に撮ることができれば、小生は世界中の人々に貢献することになるでしょう。映した映像は永久もので、変質することはあり

(7) 三原色に彩色したデンプン粒をガラス板に散らし、ニス加工した上に乳剤を塗布したもので、コダクローム開発以前もっともポピュラーなカラー写真用乾板だった。

(8) 1917年以前のロシアでもカラー写真の愛好家は多数いたが、ほとんどはオートクローム乾板を用いていた。モスクワ、ペテルブルグ、オデッサには「オートクロミスト」の協会がいくつもあったといわれる。しかし現在まで保存されているオートクロム・カラー写真は、プロクーディン＝ゴールスキー一人のコレクションよりもはるかに少ない。

ません。絵の具による着色では、決して同等の結果は得られません[9]

実際の撮影は同年5月に行われたが、嵐模様の天気のため露出には6秒が必要だった。撮影した時刻は夕方の5時半。トルストイが乗馬運動を終えた直後で、被写体本人は庭の、家の影になる部分に座り、背景にのみ日がさしている。乾板の入ったカセットは大きなもので、それをモスクワに運んで処理が施された。

上掲の手紙にうかがわれるように、プロクーディン＝ゴールスキーはカラー写真の対象再現力の正確さ、記録媒体としての効果と意味を確信しており、自身の技術や装置についても、ヨーロッパのレベルと比較して決して劣らないという自信を持っていた。

プロクーディン＝ゴールスキーの写真作品の特徴は、色彩自体の冴え(クリアーさ)と、明暗やグラデーションの精緻な反映ぶりで、たとえばシャリャーピンの肖像における濃淡に満ちた赤色と衣服の襞模様、多くの風景写真に見られる大地と空のコントラスト、水に映った影や木々の葉の緑の細やかな転調など、時代的限界を感じさせない効果を発揮している。人物の顔や手も、驚くほど明晰に再現されている。写真家自身、そうした実物の風姿の伝達は、絵画ではなく、正確なカラー写真にしかできない業だと自認していた。

画家としての素養もあった彼は、構図やシャッターチャンスの選択においても優れており、一見、競合ジャンルとしての風景画や肖像画に美的価値の点でも対抗しようとしているかに見える。しかし彼の狙いの中心は、あくまでも美的効果ではなく、記録としての価値であった。

「私は“印象派の写真家”から忠告を受けて、効果を得るためには多少レンズを緩めるべきだといわれました。[……]対象の個人的な解釈のあり方を示すために、自然そのものをではなく、それが目に映る姿を再現せよということかも知れません。しかしこれは間違っています。自然が雑誌のグラビアに載っているような形で見える人などいないからです。写真は何よりもまず記録の性格を持つ芸術であるべきです」[10]と彼は主張している。そしてその究極的な目的は、興味深いことに「未来に向けて正確なドキュメントを残すこと」であった。この思想の意味は、たとえば彼が1907年初めに撮影したトルキスタンの寺院や建物が、同年10月8日の地震で崩壊したときに実感されたのである。

皇帝に支持された、ロシア帝国の全姿を一万点のカラー写真として残すプロジェクトの背後にも、同じ思想があった。ニコライ二世に写真の効用を問われて、彼はいくつかの答えの中に祖国の実際の風景を見ることの意味を交えている。

(9) *Гаранина.* Прокудин-Горский Сергей Михайлович.

(10) 写真雑誌『写真愛好家』の記事より。引用出典は、David Elliott, “The Photograph in Russia: Icon of A New Age,” in David Elliott, ed., *Photography in Russia (1840–1940)* (London: Thames and Hudson, 1992), p. 19.

> 時々真実のロシアを、古代の記念物を、そして我々の偉大なる祖国の多様な風景の美を愛でるのは、おもしろいことだと存じます[11]。

彼の意識には、さらに将来に向けた構想があった。全国の学校にプロジェクターを設備して、次世代の子供たちに広大無辺の祖国のカラースライドを見せようという、国民教育の理念である。この新しい教育プログラムは、「祖国学」と名付けられるはずだった[12]。現代ロシアの愛好家たちの間でも、彼の残した作品は、まさに「祖国学」的な関心を持って見られている。もちろん、より現実的な効用として、歴史建築物の復元のための利用がある。彼の撮影した宗教建築のうち半数が20世紀に失われているという情報が確かだとすれば、帝国の景観をそっくり色つきで残そうとした、その先見の明に驚く他はない。

5. ロシア帝国の風景——撮影の経緯と撮影対象

現在『プロクーディン＝ゴールスキーのロシア帝国名所コレクション(Коллекция достопримечательностей Российской империи С.М. Прокудина-Горского)』などと総称されている彼の主要作品群(1917年までの仕事)は、総計3,500点と推計されている[13]。亡命時にロシアに残したその作品群のうち2,300点ほどが、1931年にパリにいた彼の手元に送られた(この具体的な経緯は不明)。ロシア(ソ連)には1,200点あまりのネガと1,000ほどのカラースライドが残ったとみられているが、その所在は不明のままである。

1948年、写真家の死後にアメリカの議会図書館に移されたとき、そのネガのコレクションは1,902点に減っていた。なお現像されたアルバムの形で残っている写真や出版された絵葉書、書籍に掲載されているもの(白黒写真も含む)もあり、そのうち多くも、同じくアメリカ議会図書館に引き取られている。現在確認されている写真作品は約2,750点で、そのうち約2,600点が議会図書館のフォンドに収まっている。これ以外に名前だけ知られて所在の知れない作品が300点以上あるという。

プロクーディン＝ゴールスキーのコレクションは、本来撮影地域ごとに以下のような「アルバム」として区分されていた。

> マリインスク運河(ヴォルガ・バルト水路):1909／諸種および習作:1903–1916／ムルマンスク鉄道:1916／ウラル:1909／ウラル(続):1910／コーカサス:1904–1905, 1912／祖国戦争(ナポレオン戦争)ゆかりの地:1911–1912／トルキスタン:1907, 1911／ヴォルガ地域:1910／ヴォルガ地域(続):1910／ヴォルガとその支流地域:1911／

(11) *Гаранина*. Прокудин-Горский Сергей Михайлович.
(12) Краткая биография С. М. Прокудина-Горского を参照。
(13) これにはロシア帝国外(デンマーク、イタリア、フランス、スイス、オーストリア＝ハンガリー)で撮られたものや、人物の肖像も含まれる。

カマ・トボリスク水路：1912 ／オカ河での作品：1912

ただしこうした分類は実際の地域分布を必ずしも反映しておらず、またロマノフ家ゆかりの地など、項目が欠けている部分もあるので、プロクーディン＝ゴールスキー自身、後に別の分類を試みている。

現代の研究プロジェクト『プロクーディン＝ゴールスキーの遺産(The Legacy of Prokudin-Gorsky)』では、撮影対象を国や地域で細分しているが、それは1913年時点の地図区分で7カ国36地域(多くは県)、現在の区分で17カ国57地域になる。町や村単位で区分したものをアルファベット順に並べたリストは、項目だけで五ページに及ぶ膨大な規模になっている。

同プロジェクトのロシア語版サイトでは、地域と撮影時期を組み合わせた、以下のようなよりわかりやすい区分が試みられている(ただし分類のみでリンクは完成していない)。

撮影地域不明の初期の写真
1909年以前に国外で撮影された写真
フィンランド大公国(1903–1905)
サンクト・ペテルブルグで撮影された写真
ルガ郡(現レニングラード州) (1904–1905)
小ロシア(ウクライナ)とクールスク県(1904–1905)
クリミア(1904–1905)
コーカサス(1904–1905, 1912)
ヤースナヤ・ポリャーナ(1908)
マリインスキー運河(1909)
北ウラル(1909)
南ウラル(1910)
ヴォルガ河(1910–1911)
ヤロスラヴリ県とヴラジーミル県(1911–1912)
トルキスタン撮影旅行(1906–1907, 1911)
1812年(祖国戦争)ゆかりの地域(1911–1912)
チェルディニとヌィロプ(ペルミ県) (1912)
カマ・トボリスク水路(1912)
ムルマンスク鉄道とソロヴェツキー群島(1916)

プロクーディン＝ゴールスキーの撮影対象は両首都を含むヨーロッパ・ロシアの北半分、



小ロシア（ウクライナ）の女性
（プチヴリ：1904年）

ウクライナと黒海北岸、コーカサス、ウラル、中央アジアにわたっており、第一次大戦と革命がなければ、おそらく中部ロシア、ヴォルガ中・下流域、シベリア、極東にまで展開していたことを推測させる。祖国学を標榜するだけあって撮影対象も広く、「プロクーディン＝ゴールスキー・コレクション概説」(14)の筆者が述べるとおり、地理、植生、民族、建築、芸術、都市や村の景観、工業、農業、交通といった多様な観点からの関心を呼ぶ「ヴィジュアル百科事典」というべき外観を呈している。



鎖につながれた囚人
（ブハラ：1907年）

撮影地域の選択にはエキゾチシズムも含めた様々な要因が働いていると思われるが、いくつか主要な関心の筋も見える。それは、運河などの建設の現場、工場・鉱山・農場など生産の現場、鉄道や船などの交通機関、非ロシア人・非キリスト教徒の居住地、聖地や宗教建築、各地の民族衣装や人間の表情、特徴的な景観などである。風土、歴史、現代の営みを含む、ロシア帝国の多様性そのものに捧げられたコレクションといえるだろう。一般にコレクションの要諦は、作品の数を増やすことよりはむしろテーマに即した特性や希少性をもつ価値ある対象を如何に厳選するかにあり、一万点でロシア帝国全土を写すというゲームは、撮影にかける労力の他に、かなり難しい選択の知恵を必要とするものに違いない。その意味でもプロクーディン＝ゴールスキーの対象選択のセンスは評価されるべきだろう。上記論文によれば、トルキスタンやロシア北部など、古い時代の記念建築物がある地域の対象選択に際しては、ニコライ・ヴェセロフスキーやニコライ・ポクロフスキーなど、考古学の専門家に教えを請うことも多かったという。



農家の娘たち
（ヴォログダ：1909年）



鉱山労働者たち
（バカル鉱山、ウラル：1910年）

(14) Общие сведения о коллекции Прокудина-Горского [http://prokudin-gorsky.org/rightpages.php?fname=cd_genrl].


綿工場に綿花を運ぶ青年
（ムルガブ、トルキスタン：1911年）

ジャンルとしての肖像写真は少ないが、生活や仕事の場での人物写真はきわめて多く、様々な民族、世代、職業のロシア帝国住民が登場している。ナターリヤ・ナルィシキナは、子供を写したプロクーディン＝ゴールスキーの写真が、対象の心理状態や性格まで写し取っていると評しているが[15]、コレクションの中の人物写真も、まさにその空間に生きる人たちの個性や気がかりの質を表現している。丸太に腰掛けた小ロシアの女性（1904年）、鎖で首をつながれたブハラの囚人のペア（1907年）、ベリーを載せた皿を持ったヴォログダの娘たち（1909年）、バカル鉱山（ウラル）の労働者たち（1910年）、らくだで綿を運ぶトルキスタンの青年（1911年）、ブハラのエミール（1911年）、コーカサス・シリーズの中の着飾ったアルメニア女性、茶畑で働くギリシア人女性たち（1912年）――すべて構成は単純ながら、それぞれの空間の持つ熱や匂いや人声まで伝わってくるような効果を持っている。デイヴィッド・エリオットはプロクーディン＝ゴールスキーの写真および写真観を評して、旧弊で想像力に欠けると見えるかも知れないが、保守的な、声なき一般大衆の代弁者の役割を果たしていると評している[16]。20世紀の写真術の実験の後に再発見されたプロクーディン＝ゴールスキーの仕事の評価として、妥当なものと思える。


ブハラのエミール（領主）
（1911年）


伝統衣装を着たアルメニア女性
（アルトヴィン、トルコ：1912年）


茶畑で働くギリシア人女性たち
（チャクヴァ（バトゥーミ）、グルジア：1912年）

6. 時代史・人物との関連

写真術は20世紀に記録、報道、大衆文化、芸術表現といった諸方面で特異な発展を遂げるが、プロクーディン＝ゴールスキーの活躍した20世紀初期は、技術的にも芸術的にも、いまだその可能性の開発が進行中の草創期だった。ロシアは相対的に後発国ではあった

(15) *Нарышкина-Прокудина-Горская*. Семейная сага: Секунды, минуты, столетия... С. 76.
(16) David Elliott, “The Photograph in Russia,” p. 19.

が、プロクーディン＝ゴールスキー自身はその不利を重視していなかった。1907年の段階で、彼は次のように述べている。

> ［……］私たちロシア人は、一所に立ち止まっているのではなく、かなり大股で先へと進んでいます。［……］私はベルリン、ロンドン、パリ、ウイーン、ミラノを訪れて、外国のカラー写真作品（これは概して、比較的最近になって普及してきたものですが）を注意深く観察してきました。その結果言えるのは、この分野においてわが国は少しも劣っていないばかりか、描出の正確さにおいては、多くの場合優越しているということです。ロシアでカラー印刷が発達しだしたのがほんの四年か五年前だということを考えれば、これは無条件に大進歩だと言えるでしょう(17)。

そもそもロシアへの写真術の導入は、1839年に化学者ユーリー・フリッチェが科学アカデミーにウイリアム・タルボットの写真術（タルボタイプもしくはカロタイプ）を紹介したことに始まる(18)。1840年、ダゲロタイプの手法を独自に応用・展開した写真家アレクセイ・グレーコフが、モスクワに「アレクセイ・グレーコフ芸術キャビネット」なる店を開き、客にタバコケース大のダゲロタイプ肖像画を提供したことから、急速に写真は普及する。19世紀中期から後期にかけてセルゲイ・レヴィツキー(1819–1898)、アンドレイ・カレーリン(1837–1906)など、国際的な評価を得る写真家が登場する。風景・記録写真の草分けの一人はカレーリンの弟子のマクシム・ドミートリエフ(1858–1948)で、19世紀末にかけて『ヴォルガ下流域の芸術アルバム』『ニジェゴロド、ヴォルガ岸の芸術アルバム』『凶作の年：1891–1892年』などの作品集を出している。他にチフリスで活動したドミートリー・エルマコフ(1845–1916)、ヴォルガ上流域を舞台としたエヴゲーニー・ヴィシュニャコフ(1841–1916)なども、優れた風景写真を残している。

1860年代から『スヴェトピシ（光描）』『写真イラスト』などの雑誌媒体も増えて技術や作品の情報が共有され、1865年のベルリン展をはじめとして、国際的な展示会への参加も恒常的になっていく。1882年には第一回全ロシア博覧会にあわせて写真展が行われ、88年のペテルブルグ写真展を契機に、両首都を舞台とした年次の写真展が開かれるようになる。世紀の変わり目頃までには素人写真家の数も増え、1890年代にはロシア全土に40を越える写真協会やクラブのたぐいがあったといわれる。そのうち最大のものは、モスクワ写真協会とキエフの『ダゲロ』で、主として芸術写真の分野で活動していた。

20世紀に近づくにつれて記録・報道写真のジャンルが展開し、カルル・ブッラ(1853–1929)、ピョートル・オツプ(1883–1963)、ヤーコフ・シテンベルク(1888–1942)などが活躍

(17) *Гаранина.* Прокудин-Горский Сергей Михайлович.

(18) 以下、ロシアの写真術史については、次の書籍を参照した。David Elliott, ed., *Photography in Russia (1840–1940)*; *Стигнеев, В. Т.* Век фотографии. 1894–1994. Очерки истории отечественной фотографии. М.: Дом Книга, 2005.

した。ブッラは報道記者として種々の事件の現場に赴き、日露戦争やラスプーチンのいる宮廷など、歴史的光景や人物群を記録した。オツプもレーニンをはじめ歴史的人物を多く撮影している。

美の表現や発見に向けた芸術写真も20世紀にさしかかると、絵画的な枠を外れた独自の展開を遂げるようになる。この時代にはニコライ・ペトロフ(1876–1940)の世代からアレクサンドル・ロートチェンコ(1891–1956)の世代まで、分厚い写真家の層ができた。

前出の帝室技術協会の化学産業および冶金学部門にも、メンデレーエフをはじめとして写真に関心を持つ化学者が集まっていた。1878年にはそこから第五部門(写真およびその応用部門)が誕生し、ロシア写真学の発達を牽引するようになる。上記の1882年全ロシア博覧会の写真展は、この部門に多くを負うものだった。後にプロクーディン＝ゴールスキーも所属したこの部門は、写真化学、写真光学、写真技術の開発を主旨としながら、その応用や芸術表現にも深く関わっていた(19)。プロクーディン＝ゴールスキーはそうした関心と技術を背景としながら、上記モスクワ写真協会に(リュミエール兄弟とともに)名誉会員として選ばれ、やがて最良の写真雑誌『写真愛好家』の編集長も務めることになる。そして表現者としては、ドミートリエフやヴィシュニャコフに似た風景と生活の記録を精密な天然色写真で行い、ロシア帝国全土に展開することを目指したのである。

ちなみに、プロクーディン＝ゴールスキーのスポンサーとなったニコライ二世と彼の家族も写真を好み、カルル・ヤゲリスキー、セルゲイ・レヴィツキーなどの写真家の教授を受けていた。ニコライはコダック社が彼専用に製造したパノラマの撮れるカメラを持っていた。家族は互いの肖像や自然風景を撮影し、アルバムにして贈り合うのを好んだ。后妃アレクサンドラの腕前はミュンヘンの『写真世界』編集者に認められ、アルバム『皇族による写真芸術』に参加を促されたという(20)。皇族から地方の住民まで、写真に魅せられた時代だったといえるだろう。

時代史的にいえば、プロクーディン＝ゴールスキーの周囲にはきわめて興味深い人物が複数いた。トルストイ、シャリャーピン、ニコライ二世とその家族もその仲間だが、未知な部分を含んでいるのは、化学者メンデレーエフ、および画家レーリヒとの関係である。メンデレーエフはプロクーディン＝ゴールスキーがペテルブルグ大学物理数学部自然科学科で聴講していたときの教授陣の一人。英語版のプロクーディン＝ゴールスキー写真集の編者ロバート・オールスハウスは聴講生時代のプロクーディン＝ゴールスキーがメンデレ

(19) この時代の写真協会、展覧会、帝室ロシア技術協会の役割、写真雑誌、写真に関する美術的・記録的見方の対抗などについては*A Portrait of Tsarist Russia: Unknown Photographs from the Soviet Archives* (with text by Y. Barchanova, *et al*.; translated from the German by Michael Robinson) (New York: Pantheon Books, 1989)の序文に概説されている。

(20) *Александрова К. А.* Император Николай II и художественные процессы в русской культуре рубежа XIX–XX веков. Диссертация на соискание ученой степени кандидата искусствоведения. М., 2009. С. 201.

ーエフのもとで学んだことを誇りとし、とくに1887年に53歳の化学者が気球で日食観測をした精神に強い影響を受けたことを、1922年の自伝的手記に書き残したと記述しているが(21)、その手記は発見されていない。しかし直接の関係は別にして、ともに写真術に関心を持つ二人の野心的な化学者が、ある時空間を共有した事実は、きわめて興味深い。

レーリヒの名前は1911年の伝記に垣間見える。同年1月21日帝室ロシア地理学協会民族学部門で「芸術家レーリヒとプロクーディン＝ゴールスキーが映画および写真撮影のためにヴォルガ、ウラル、中央アジア旅行を提案」との発表があったという記録である。ただし両者が撮影旅行をともにしたという記録は残されていない。ちなみに国際共同研究『プロクーディン＝ゴールスキーの遺産』のサイトには、この写真家の伝記の謎の部分に関するページ『プロクーディン＝ゴールスキーの謎』があり、41の問が記されているが、上記の二人物との関係も、そこに含まれている。1916年にムルマンスク鉄道に赴き、オーストリア人の捕虜を撮影しているが、その旅の動機も謎の一つである。

おもしろい符合の一つとして、ニキータ・ミハルコフの映画『愛の奴隷』（1975年）にオーシプ・ユーリエヴィチ・プロクーディン＝ゴールスキーというモスクワの映画監督が登場する。これは架空の人物だが、1911年以降プロクーディン＝ゴールスキーがカラー映画の撮影に取り組みはじめたことと重なっている。ちなみに彼の撮ったカラー映画は、いまだ一点も見つかっていない。

7. 現代の研究動向と論者の関心

プロクーディン＝ゴールスキーによる帝政末期のカラー写真数千枚は、「失われたよきロシア」の表象として、現代的な意味と機能を付与されている。また100年前の写真技術で作られた資料を、現代のデジタル技術環境で再生し、インターネット世界で共有するという作業にとっても、よき題材となっている。2000年には、米議会図書館所蔵のネガがロシア科学アカデミーデジタル技術修復センターと科学修復センター（「Реставратор-М」）の協力でデジタルカラー写真として復元された。そのうち100点がヤロスラヴリ国立大学の新情報技術センターの技術により大判のカラー写真とされ、在ロシアアメリカ大使館によりロシア六地域で巡回展示された。2004年にはロシア国立図書館の関与でロシア連邦議会での展示も行われた。デジタル資料は米議会図書館のウエブサイトでプログーディン＝ゴールスキー・コレクションとして公開されている(22)。2008年にはロシア側を主体として国際研究プロジェクト『プロクーディン＝ゴールスキーの遺産』が立ち上げられ、コレクション自体をはじめ、撮影地の地図資料、作品論、伝記研究その他関連の資料や議論がウエブサ

(21) Robert H. Allshouse, ed., *Photographs for the Tsar: The Pioneering color Photography of Sergei Mikhailovich Prokudin-Gorskii commissioned by Tsar Nicholas II* (New York: The Dial Press, 1980), p. X.

(22) “Produdin-Gorskii Collection” [http://www.loc.gov/pictures/collection/prok/].

イト上にロシア語・英語で公開されている[23]。

写真集の出版も1980年のロバート・オールスハウス編集によるアメリカ版をはじめ各国で進行中。2007年からミンスクのベラルーシ正教会によるシリーズものの出版が始まっている[24]。

プロクーディン＝ゴールスキーの仕事は、社会史、技術史、美術史、心性論、風土論、文化人類学、帝国論といった様々な立場からアプローチできる、豊かな素材である。ただしその研究はまだ緒に就いたばかりであり、資料的にも方法的にも、今後の発展・展開を待つべき要素が多い。上述のような共同研究と情報・資料の共有が行われているので、急速な進展を期待する根拠は大きいだろう。

本論の著者自身は二次資料を参照しながら、その作品の総体を把握しようとしている状態で、専門的な研究とはかけ離れた段階にいる。ただ、ロシアの心象風景の歴史に関する自分の関心と重ねて、彼の作品を自分なりに分析し、写真家の目と技術を介して伝えられた帝政期ロシアのイメージから読み取られるものを探ってみたい。具体的には、彼が訪れ、撮影した場所それぞれの地理的・文化的特徴や歴史的背景を調べ、そこに映っているものの性格や意味を明らかにして、この人物が見た帝政ロシアの姿を言語化することを試みてみたい。さらには、同時代史と照らし合わせて、彼が記録し、後世に伝えようとしたロシアの特徴を、そこに描かれなかった世界との対比において捉えてみたい。同時代の他の写真家や作家たちの描き出したロシア像との比較も、大きな関心の的である。

そうした作業の先に、プロクーディン＝ゴールスキーの写真家としての「移動の詩学」も、また「境界研究」にとっての意味も、より明快に見えてくることだろう。

＊本稿は科学研究費補助金基盤研究（B）「近代ロシア文学における『移動の詩学』」（代表：諫早勇一）の共同研究の成果でもある。

なお、本稿に挿入した写真は以下のプロクーディン＝ゴールスキーカラー写真全作品データベース “Complete Database of S. M. Prokudin-Gorsky Color Images (1902 photographs)” [http://www.prokudin-gorsky.ru/database.php3?first=0] から引用した。

(23) Международный научный проект «Наследие С. М. Прокудин-Горского» [http://prokudin-gorsky.org/index.php?lang=ru].

(24) 主な出版は以下の通り。

Robert H. Allshouse, ed., *Photographs for the Tsar: The Pioneering Color Photography of Sergei Mikhailivich Prokudin-Gorskii commissioned by Tsar Nicholas II* (New York: The Dial Press, 1980);

Российская империя в цвете. Владимирская и Ярославская губернии. 1909–1915. Альбом фотографий С. М. Прокудина-Горского. Минск: Белорусская православная церковь, 2007;

Российская империя Прокудина-Горского. 1905–1916 / Под ред. С. Гаранина. СПб.: Амфора, 2008;

Robert Klanten, ed., *Nostargia. Das Russland von Zar Nikolaus II. In Farbfotografien von Sergei Michailowitsch Prokudin-Gorski* (Berlin: Gestalten, 2012).